
夏の花火とおばあちゃん

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の花火とおばあちゃん

【NZコード】

N9556B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

エッセイです。夏、といえば花火。花火、といえばあたしはおばあちゃんんだ。

匂いが好きだ。たくさん吸うと匂るけど。

それからやつぱり綺麗で好きだ。夜闇に星みたいに光るそれ。

なんのことかといふと、花火の話。

わたしは小学生の四年生の頃まで毎年、夏といえばおばあちゃん家だった。学校が終わって七月は宿題をやって過ごし、八月の一日、あるいは三十一日の夜に新幹線に乗つて長野にいるおばあちゃんの家に行く。

そんなときに必ずおばあちゃんが買っておいてくれたのが大きな大きな花火のセット。ぶわっと本当の花みたいに咲くやつや、ぱちぱちひかえめなやつ。たくさんのお花火がたくさん入ったそれをわたしはいつだってたつた一日で遊びきってしまう。

おばあちゃんは数本、わたしの花火を眺めた後にろうそくを乗せたお皿を取つて、「今日はもうおしまいにしなきやだよ」と言つけれど、わたしはそれをちつとも聞かないで、ありつたけの花火をやつた。やがて一人でそれをするのに飽きたらもう腰がだいぶ曲がつてきたおばあちゃんに無理はさせられないと幼心にわかつていたので、けどおばあちゃんに無理はさせられないと幼心にわかつっていたので、何本か付き合つてもらうと、おばあちゃんの代わりに家事をするお母さんに頼んで近所に住む高校生のなごみちゃんに来てもらつた。なごみちゃんはおばあちゃんの家から自転車で五、六分のところにある農家に住んでいて、いつだって笑顔の憧れの人だつた。

「おじやましまーす」

その声がするとわたしはやつたと思つて玄関までばたばたとお出迎えに行つた。なごみちゃんはいつも右手にスーパーの袋を持って、そこには丸丸のスイカが入つている。

「これ、うちのなんですか、どーぞ」

お母さんに入力を渡すとなごみちゃんはわたしの手を取つてお

ばあちゃんのいる縁側へ連れて行つてくれる。

「さ、始めよーか！」

高校生のなごみちゃんは一つある大きいつつかけ 大人用 のを穿いてわたしは小さいのを穿く。

「危ないから、気をつけるんだよ」

おばあちゃんにも言われたけどわたしはうん、と首を振つて、花火の続きをした。

「綺麗だね！」

いつの間にかお母さんも家事を終えて、なごみちゃん家のスイカを持つて庭にやってきて、それを食べたら最後にはおばあちゃんも入れてみんなで線香花火をする。

寂し気なその香りに、光にわたしがひとつりして来てよかつたなと思うのだった。

「また来年も花火、できるといいねえ」

四年生の夏休みの三十日。駅でおばあちゃんがそう言つて、前年の同じようにそこで泣いた。見送りに来ててくれたなごみちゃんはそのとき必ずわたしを抱きしめてくれるのだけど、涙は止まらなかつた。

ちょっと変だなと思ったのはなごみちゃんの腕が強すぎるほどにわたしを抱いたこと、そして、おばあちゃんが、「できるといいねえ」と言ったことだ。いつもなら「しようねえ」なのに、「できるといいねえ」になつている。わたしはやけにその部分を強く覚えていて、後から考えると本能で死期を悟つたのかもしれない。

その年の冬、おばあちゃんは眠つた。お母さんが大事な用があつて、一日長野に行くと言つて家を空けた翌日のことだつた。涙でかれた声は聞き取りにくくて、実際に死んだことをはつきりと聞いたのは家まで迎えに来てくれたなごみちゃんからだつた。

「おばあちゃんね、眠つちゃつたみたい。もづづと起きないんだつて」

そのとき初めてなごみちゃんが恐ろしく大人に見えて、怖かつた。

わたしはどこへ連れて行かれるの？ なごみちゃんは一緒によね？
だけどなごみちゃんの涙を見た瞬間にやつぱりわたしと同じなん
だと少しだけ安心できた。

「ねえ、花火さあ…」

長野へ向かう新幹線の中で、わたしは高速で移る景色をぼうっと
見ながらつぶやく。

「また来年もやろーね、今度はわたしがそっちに行っちゃおうかな
なごみちゃんは笑った。本当はそんな状況じゃないのに、笑つて
くれた。

そして、夏になると約束どおりになごみちゃんはわたしの家に來
てくれた。大きな大きな花火のセット持つて。
　ああ、綺麗。いい香り。ちょっと咽喉が痛いけど、それでも花火
が好きである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556b/>

夏の花火とおばあちゃん

2010年10月11日11時19分発行